

幼い頃から苦手な食べ物のひとつがナスだった。小学校の給食でナスの煮物や漬物が登場した際には、「えいやつ！」と飲み込む踏ん切りがつかなくて、食後の掃除の時間が終わるまで居残り、穴が空くほどとことん見つめ合うこともしばしばだった。大人になって多少は苦手意識を克服できたものの、口にする時、あの頃の小さなトラウマがフランシュバッケのよう蘇ることもある。そんな自分がちょっと落ち込んだりしたときに読み返している、ナスを題材にした文章がある。第69回全国小・中学校作文コンクールに応募された小学2年生の山下心子さんの「なす一人」という作文だ（ウェブ公開されている）。あらすじは、小学校ですきな野菜を育てることになったがナスを選んだのはクラスの中で彼女ひとりだけ。「なすきらい」という同級生の正直な声に少し傷つきながらも「かなしい気もちも、なすといっしょにゴクンとのみこみました」と綴る。ナスをめぐるさまざまなエピソードとともに悲喜こもごもの学校や家族の日常が活写されてゆくわけだが、とりわけ結びの一節に心うたれる。

なすはたくましいです。トマトが多くいたのに、まねしません。一人でも大きななすをみのらせました。なすとくらべると、わたしはよわ虫でした。ゆう気を出して声をかけたら、友だちができました。学校がたのしくなつてきました。目ひょうをもう1回がんばろうかな。手をあげて、はっぴょうできたらいいな。

## 工藤量導

拭つても拭つても  
拭いきれないなら  
それももう一緒に  
連れて行こうよつまり  
生きてくつてそうゆうこと  
折れ曲がつてねじ曲がつて  
ぐちやぐちやになつても  
まつすぐに行こう！行こう！

（矢野絹子「まつすぐブルース」より）

## ナスのように独り歩め

OP  
山下心子  
原作

微

風

吹

動

つかみとるもの、ナスは「為す」に通じているからとも言われる。ナスは形から丸茄子、中長茄子、長茄子の品種に分けられるが、長茄子は受粉不良や肥料、水、日照の不足によってU字に曲がってしまうことが多い。それでもグイっとひん曲がった黒光りの勇姿にこそ、インドからの旅路を牛歩で進んでやつてきたナスの運命や労苦をしのばせる貫禄があり、ついには東アジア進出という大義を「為す」たくましさが存分に表れていて、なんだか格好よく思えてきた。

お釈迦さまはかつて「犀の角のようにただ独り歩め」という言葉を残された。サイの頭部にそそり立つ一本角のように、他者の言動にまどわされることなく、ただ真理の教えにしたがつて独りで自らの歩みを進めなさいという意味である。仏教の精神的主柱ともいってべき堅固な姿勢を示すもので、さまざまな時代・地域・民族・言語・文化を渡り歩いて幾多の品種改良を経ながら、それでもなお仏教としてのアイデンティティが各地で保持されているのは、やはり「独り歩む」という変わらぬ実践重視の精神が芯を貫いているからであろう。

その伝播の傍らに、ナスの旅路もあった（かもしれない）。その実、拭い切れない弱虫ごころをその身に抱えつつ、折れ曲がって、ねじ曲がって、傷だらけ泥だらけ、ぐちやぐちやになつても、誰の真似をするわけでもなく、たくましくまつすぐに独り歩まんとする「為す」のブルース精神。その凛々たる勇気をたたえて、この夏はたわわに実った茄子を口いっぱいにほおばる挑戦を誓いたい。

くどう りょうどう 1980年青森県今別町生まれ。青森教区本覚寺副住職。博士（仏教学）。浄土宗総合研究所研究員、大正大学非常勤講師、淑徳大学兼任講師。専門は中国浄土教、著書に『迦才「浄土論」と中国浄土教—凡夫化土往生説の思想形成』（法藏館、2013年）など。

誰かと比べることなく「そのままでいい」という生き方をナスに教わる瑞々しい感性。ちなみに「瓜の蔓に茄子はならぬ」という慣用句は本来、平凡な親から非凡な才能の子は生まれないとという意味だが、右の文を読んで、むしろ瓜やトマトの真似をしない、変わらぬナスのたくましさに思いが及ぶようになった。そんな風にして、ちょっとずつナスのことが気になりだした今日この頃。調べてみると、ナスの原産はインド東部で有史以前から栽培が始まり、シルクロードを通つて5世紀以前には中国へ伝わって普及したという。日本では8世紀半ばの正倉院の古文書に記録があり、10世紀に書かれた『延喜式』という書物には栽培方法や漬物加工が説述され、全国各地に広まってさまざま在来品種が作られるようになり、戦前は果菜類の中でも収穫量のトップを誇っていた。

日本に伝来するまでの道程をたどつてみると、ちょうど仏教東漸（仏教の東方への伝播）と軌を一に追隨していくことが興味深い。そもそも仏教発祥のインド東部が原産地であり、仏典の記述に使用されるサンスクリット語にもナスを表す単語が複数存在している。古の仏教者たちもナスを口にして修行に励んだのだろうか。日本仏教との関連でいえば、ナスに割り箸などの足を付けて牛や馬に見立てたものを精靈棚に飾るお盆の風習を思い浮べる方も多いだろう。また、昔から「一富士、二鷹、三茄子」といつて、縁起のよい夢の順序のひとつに挙げられている。由来には諸説あるようだが、富士は高大なもの、鷹は